

授業研究を通じた国際交流についての考察

—— 日韓の学生による記述の分析から ——

井上 奈穂

(キーワード: 異文化 授業研究 授業観)

1. 問題の所在

2017年に改訂された学習指導要領の総則では、学校教育に求められているものとして、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること(文部科学省, 2017, p.1)」が挙げられている。これらは、子供の育成にかかわる教員にとっても必要なものといえよう。つまり、社会のグローバル化が進み、学校教育の文化的な多様性が高まりつつある中、教員自身も自らの文化のみに固執することなく、幅広く、多様な見方や考え方、態度などを身につけ、国際化する教育に柔軟に対応できることが求められている。

このような要請に対し、これまでも様々な試みが行われてきた。例えば、韓国に出向き、授業を介した教師や学生による交流を通して、相互理解を図ろうとする実践(谷川編, 2005)、日本、韓国の小学校との「対話」を通して共通した歴史的事象についての教科書を作成する「真正な対話」に基づく対話型国際理解教育の実践(金, 2016)などが挙げられる。また、これらの試みの中には、先の共同的な作業を核とした試み以外に、教師や学生の人的交流や姉妹校などの学校交流がある。鳴門教育大学でも、「現職教員及び将来教員となる大学院学生及び学部学生が、異文化理解、語学力及びコミュニケーション能力の向上のみならず、留学等の機会を通して未知なるものへ挑戦しようとする力(チャレンジ力)や国際的な知見やセンスを身につけ、初等中等教育段階における教育の向上に貢献できる教員となることをねらいとするグローバル教員養成プログラム」が設定されており、「専門領域の国際的な知見を養う」、「日本語教師を目指す」、「開発途上国の教育力向上に貢献する」、「英語コミュニケーション力をUPさせる」、「教育実習を海外で行う」の5つのテーマに基づき、グローバル教員養成プログラムを行っている。2019年度は16プログラムが実施もしくは実施されている¹⁾。

これらは、交流に主眼が置かれ、活動主義に陥ってしまう危険性²⁾があること、移動にかかる経済的な負担といった課題はあるものの、一般的なものであり、他者と直接に触れ合うことから、国際交流として分かりやすく、交流そのものに一定の効果があるといえる。

本稿では、16プログラムのうちの1つである「社会科教育プログラム」を取り上げ、交流の実際と交流を経た学生の見方・考え方の特徴から、交流そのものの意義と課題について考察を行う。

2. 研究の方法

(1) 社会科教育プログラムの位置づけ

この社会科教育プログラムで連携している光州教育大学校は大韓民国の南部の光州広域市にある初等教育を中心とした教員養成を行っている大学である。1938年3月に光州師範学校として開校し、その後、附属国民学校、光州師範学校、光州教育大学を経て、現在の光州教育大学校がある。鳴門教育大学と光州教育大学校は2011年から大学間交流締結を結んでおり、本論文で取り上げる社会科教育プログラムの他に、生徒指導プログラムも行っている。

今回取り上げる「社会科教育プログラム」の企画・実行については、光州教育大学校の李貞姫氏に、光州教育大学附属小学校での授業見学をはじめ、様々な企画の実施、コーディネートなどの面でご協力いただいている。プログラムとしては、社会科の授業参観とその検討及び光州広域市のフィールドワークで構成されている。特に、2017年、2018年は「主権者教育」の視点から、日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育

成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考える³⁾」ことを目的とし、鳴門教育大学の学生が光州教育大学校に訪問する形で行っている。プログラムの内容としては、光州教育大学附属小学校の授業参観及び参観した授業を対象とした検討会を担当した教師と行っている。いずれの活動においても、光州教育大学校の学生と行い、活動の中で自然な交流が行われるようにしている。

(2) 研究の方法

交流を通じた学生の見方・考え方の特徴を明らかにするにあたり、KH Coder⁴⁾を用いる。KH Coderは、語の選択に当たり恣意的となり得る「手作業」を廃し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示することとコーディング規則を公開するという手順を踏むことによって操作化における自由と客観性の両立を可能にしている(越中ほか, 2015)。今回は、交流を通じた学生の見方・考え方の全体的な傾向をつかむために、この分析ツールを用いることとした。以下、研修の具体を示し、その上で、学生の記述の特徴を整理していく。

3. 研修の具体

(1) 研修の概要

光州教育大学校での研修は、移動日も含め、5日間(2017年11月23日から11月27日)で行った。光州は朝鮮半島の南部に位置し、徳島からの移動はソウルを経由し、バス、KTXで1日かかる。そのため、研修全体としては5日間であるが、移動日を考えると実質3日間の研修であった。

表1. 海外研修日程

| 日順 | 月日(曜日) | 発着地(滞在地) | 内 容 |
|----|-----------|---------------------------|--|
| 1 | 11月23日(木) | 鳴門→関空 関空→ソウル ソウル→光州 | 移動 バス(松茂6:00→関空8:40) 移動 アシアナ航空 OZ1135(関空11:50→金浦13:40) 移動 リムジンバス(6014)・光明駅 KTX→光州松汀駅 移動 車(→光州教育大学校) |
| 2 | 11月24日(金) | 光州 | 光州教育大学附属小学校での授業参観及び光州教育大学校での授業検討会 |
| 3 | 11月25日(土) | 光州 | 光州フィールドワーク 光州及び周辺の文化施設見学等 |
| 4 | 11月26日(日) | 光州→ソウル | 移動 光州教育大学校→光州松汀駅(車) 移動 光州松汀駅→ソウル中心部(KTX, 地下鉄) ソウル周辺文化施設見学等 |
| 5 | 11月27日(月) | ソウル→関空 関空→鳴門 | 移動 ソウル市内→金浦空港(バス) 移動 アシアナ航空 OZ1165(金浦発17:45→関空19:25) 移動 バス(関空21:05→松茂23:50) |

(研修の日程表を基に筆者作成)

メインとなるのは、11月24日(金)の光州教育大学附属小学校の授業参観及び光州教育大学校での授業検討会である。今回、訪問した学生のほとんどが、韓国が初訪問だったということもあり、授業参観・検討会だけでなく、光州市内の文化施設等の見学も盛りこむことで、韓国の様子を肌で感じる機会を設けた⁵⁾。

(2) 参観した授業の概要

2017年の訪問の際、光州教育大学附属小学校で参観した授業を整理したものが以下の表2である。

小学校第3学年と第6学年の授業であり、いずれも自国とは異なる文化を持つ国々をテーマとしている。光州教育大学附属小学校はユネスコスクールにも登録されており、海外との交流を積極的に行っている。また、本授業を行ったユ・ジョンヒ氏、キム・ジョンフン氏は、経験豊富な教員であり、授業検討会、交流会までご協力いただいた。なお、本授業を参観するにあたり、事前に指導案を作成いただいた。日本から訪問した学生には指導案を翻訳したものを渡し、事前に授業の様子を把握したうえで参観するようにしている。

表 2. 光州教育大学附属小学校での参観授業

| 学年 | テ ー マ / 目 標 | 授業者・実施日 |
|-----|---|-------------------------|
| 第 3 | アジアの色々な国の人々の生活の姿を調べる ：我が国または、他の国の多様な生活の姿を調査し、それぞれの生活の類似点と相違点について説明することができる | 授業者：유정희 2017/11/24実施 |
| 第 6 | 世界の様々な地域の自然と文化 ：世界の様々な国の環境と生活及び世界の様々な国と我が国との関係に対する理解を通して、世界市民としての基本的能力と態度を持つことができる | 授業者：김경훈 2017/11/24実施 |

(研修の日程表を基に筆者作成)

(3) 参観した授業の実際

1. 「アジアのいろいろな国の人々の生活」(小学校第3学年の社会科)

この授業は「アジアの色々なアジアの色々な国の人々の生活の姿について調べる」を学習テーマとし、到達目標は、「我が国または、他の国の多様な生活の姿を調査して、それぞれの生活の姿の類似性と差異性について説明することができる」である。

以下、授業の流れを示す。表3は、事前に学生に配布した資料を基に作成したものである。

この授業は、アジアの人々の生活の姿について事前に調べた内容をグループごとで紹介するというものであった。図1にあるようなパネルを各グループが用意しており、それぞれのグループに移動し、発表を視聴するというものであった。そのため、鳴門教育大学、光州教育大学校の学生も授業に参加し、各グループの発表を聞く機会を得た。

言葉が分からない中ではあったが、模造紙での絵や写真による説明により、内容をつかむことができたようであった。

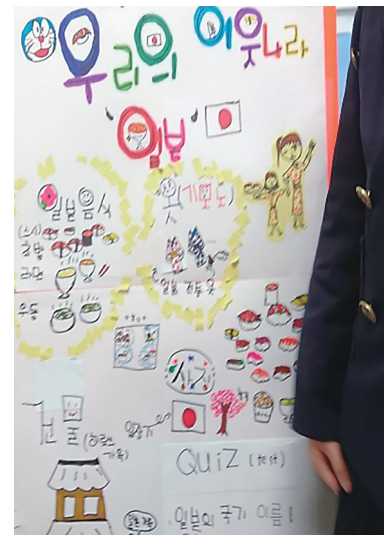


図 1. 児童作成パネル (一部)

表 3. 授業「アジアのいろいろな国の人々の生活」の流れ

| 学 習 活 動 | 資料及び指導上の留意点 |
|---|---|
| 1. 学習テーマ「アジアの色々な国の人々の生活の姿について調べる」を確認し、グループごとに紹介の準備をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ユネスコの広報パンフレットを用いて、学習テーマについて確認する。 ・グループで調べた国について発表する用意をする。 |
| 2. アジアの人々の生活の姿についてグループの発表を紹介・見学に行く (1) 興味がある国についての発表を見に行き、国別の生活の姿を調べる。 (2) 自身のグループで調べたアジアの国の生活の姿について、興味がある人に説明する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・発表するためのイーゼルやウッドラックを用意する。 ・教室全体を発表の場として用意し、他の国の多様な生活の姿に気づき、文化に伴う考えと行動の違いを把握させる。 ・グループで担当した国について、説明するよう支援する。 ・興味がある発表をしているグループには、「シール」を渡すように支援する。 |
| 3. 我が国における人々の生活の姿と比較し、共通点と差異点に気づき、その理由について考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域や国によって固有の文化的特性があること、我が国または他の国の多様な生活の姿に気づかせ、文化によって人々の考えと行動が異なることを理解させる。その際、文化の特質を比較することができるように支援する。 |
| 4. 本日の内容を整理する。 ・アジアの国の人々の生活の姿をまとめる。 ・さらに調べてみたい点を発表する | <ul style="list-style-type: none"> ・異なる文化について理解し、それらを受け入れる姿勢を持つことができるよう支援する。 |

(光州教育大学附属小学校のユ・ジョンヒ氏の指導案を井上が再構成したものである)

2. 「世界の様々な地域の自然と文化」(小学校第6学年の社会科)

この授業の位置づく単元は世界の色々な国の環境と生活の姿を理解し、世界の色々な国と我が国との関係を理解することによって、世界市民としての基本的能力と態度を育てるところに主眼点を置いていた。参観した授業(表4)では、この導入に位置づく授業であり、教科書にある絵(図2)を見て、問いをつくるハブルタ⁷⁾学習を取り入れ、単元全体の流れと内容を予想するものであった。

表4. 授業「世界の様々な地域の自然と文化」の流れ

| 学 習 活 動 | 資料及び指導上の留意点 |
|---|---|
| 1. 単元「世界の様々な地域の自然と文化」についての興味関心を高めるために、教科書の pp. 112-115 を見て、この絵からわかることについて話し合う。 | ・単元の導入部であるため、いろいろな意見が出てくるように支援する。 |
| 2. 学習テーマ：問いを作る「ハブルタ」で単元「世界の様々な地域の自然と文化」がどんな内容になるか、予想する。 (1) 教科書 pp. 112-115から問いを3個以上上げる (2) (1)で挙げた問いについて、パートナーと話し合い、よい問いを2つ選択する。 | ・ハブルタの形式を使い、パートナーとの討論、グループでの討論、クラス全体での討論と話し合い集団の規模を変え、話し合いが活発に進むよう支援する。 ・引き出す問いの数を設定し(パートナーとのやり取りでは2つ、グループでは6つ、最後は1つ)、話し合いの目的を明確にする。 |
| 3. 問いについて、グループで話し合う。 (1) もっともよい問いを1つ選ぶ (2) (1)に対する答えをインターネット等で調べ、結果をホワイトボードに整理する。 | ・インターネット等を活用し、生徒が主体的に調べよう支援する。 |
| 4. 考えた問い・調べたことについて発表する ・グループで考えた「最もよい問い」とそれに対する答えを全体に発表し、内容を検討する。 | ・電子黒板等を活用して、調べたウェブページの共有など行い、問いと答えについての発表が効果的に伝わるよう支援する。 |

(光州教育大学附属小学校のキム・ジョンフン氏の指導案を井上が再構成したものである)

この授業では、絵(図2)⁸⁾を見て、疑問に思ったことを書き出し、その疑問をインターネットを通して調べ、発表する様子を見ることができた。また、調べ学習では、グループごとにiPadがあり、それを活用している様子も見られた。グループで調べたことは電子黒板で資料を示しながら説明をしていた。

この授業で用いられていた「ハブルタ」⁷⁾は、日本ではあまり行われていない方法であり、日本の学生も興味深く聞いていた。

授業参観の後、授業検討会を行い、各授業について

学生同士でディスカッションを行った。まず、授業者に授業の意図について説明した。それを受け、①事実の確認(意図が分からなかったこと)、②良い点・悪い点、日本の授業との違い、③日本から見た韓国の授業の特徴、④①～③を受けての韓国の学生からの疑問などを出し合い、議論を行った。

4. 学生の反応

(1) 分析の実際

3. で示した研修を受け、日本と韓国の学生に研修を通しての感想を書かせた。この感想はどのようなものが書かれていたのだろうか。ここでは、韓国の学生(7名)と日本の学生(4名)に書かせた計12名分の授業参観の感想として書かれた自由記述を分析対象とし、テキストマイニングによるKH Coder3を活用した分析を行った⁸⁾。

まず、最初にKH Coderを用いて、「前処理」を実行し、文章の単純集計を行った。結果、146の段落、127の文が確認された。また、総抽出語数は、4,529、異なり語数は706であった。自動的に取り出すと、「光州教育大学校」

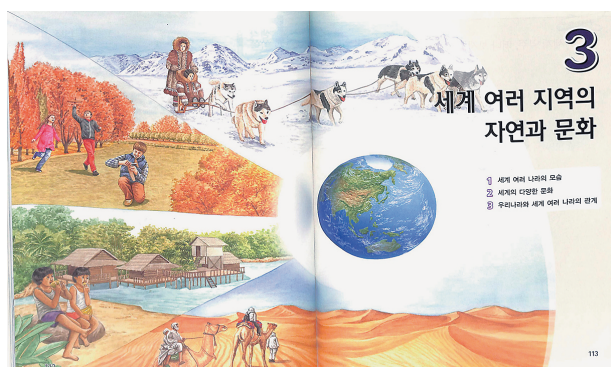


図2. 授業で示された絵(教科書より抜粋)

が「光州」と認識されてしまい、意図通りの抽出とならないことがあるため、「鳴門教育大学」、「光州教育大学校」及び「光州教育大学附属小学校」を強制抽出の対象とした。また、授業の中で教具として「ホワイトボード」が取り上げられていたが、「ホワイト」と「ボード」で認識されてしまうため、これも強制抽出の対象としている。

以下の表5は、上記の操作を踏まえ、出現頻度の多い単語から上位150語を整理したものである。

表5. 頻出語の一覧

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|-------------|------|---------|------|-----------|------|
| 授業 | 64 | 学年 | 5 | 学校 | 3 |
| 日本 | 49 | 教師 | 5 | 気 | 3 |
| 教育 | 29 | 交換 | 5 | 共有 | 3 |
| 多文化教育 | 27 | 行く | 5 | 興味 | 3 |
| 韓国 | 22 | 高い | 5 | 今後 | 3 |
| 行う | 21 | 施設 | 5 | 姿 | 3 |
| 学生 | 19 | 自身 | 5 | 視点 | 3 |
| 見る | 19 | 情報 | 5 | 実習 | 3 |
| 思う | 19 | 生徒 | 5 | 実践 | 3 |
| 文化 | 19 | 先生 | 5 | 主張 | 3 |
| 子ども | 17 | 多く | 5 | 重視 | 3 |
| 社会 | 17 | 探す | 5 | 出る | 3 |
| 学習 | 14 | 知る | 5 | 進む | 3 |
| 発表 | 14 | 導入 | 5 | 進める | 3 |
| 交流 | 13 | 日本語 | 5 | 世界 | 3 |
| 多い | 13 | 部分 | 5 | 全体 | 3 |
| 意見 | 12 | 様々 | 5 | 単元 | 3 |
| 感じる | 12 | 用いる | 5 | 地域 | 3 |
| 国 | 12 | クラス | 4 | 踏まえる | 3 |
| 児童 | 12 | 意識 | 4 | 同級生 | 3 |
| 自分 | 12 | 学ぶ | 4 | 同様 | 3 |
| 活用 | 10 | 関心 | 4 | 特に | 3 |
| 参観 | 10 | 気づく | 4 | 内容 | 3 |
| 小学校 | 10 | 共通 | 4 | 附属 | 3 |
| 多文化 | 10 | 教科書 | 4 | 良い | 3 |
| 鳴門教育大学 | 10 | 光州教育大学校 | 4 | 話し合い | 3 |
| 理解 | 10 | 指導 | 4 | ICT | 2 |
| 違い | 9 | 資料 | 4 | ありがとう | 2 |
| 我が国 | 9 | 質問 | 4 | その後 | 2 |
| 問い | 9 | 実際 | 4 | アクティブ | 2 |
| グローバル | 8 | 主体 | 4 | イラスト | 2 |
| ハブルタ | 8 | 受ける | 4 | ビデオ | 2 |
| 課程 | 8 | 早い | 4 | プレゼンテーション | 2 |
| 活動 | 8 | 段階 | 4 | プログラム | 2 |
| 機会 | 8 | 調べる | 4 | ラーニング | 2 |
| 驚く | 8 | 適応 | 4 | 育てる | 2 |
| 光州教育大学附属小学校 | 8 | 展開 | 4 | 一緒 | 2 |
| 今回 | 8 | 答え | 4 | 家族 | 2 |
| 参加 | 8 | 討論 | 4 | 楽しい | 2 |
| インターネット | 7 | 必要 | 4 | 関係 | 2 |
| 検討 | 7 | 方法 | 4 | 韓 | 2 |
| 考える | 7 | 目指す | 4 | 機器 | 2 |
| 持つ | 7 | 様子 | 4 | 議論 | 2 |
| 対話 | 7 | ICT | 3 | 教える | 2 |
| 非常 | 7 | アジア | 3 | 教室 | 2 |
| グローバル | 6 | 異 | 3 | 興味深い | 2 |
| 違う | 6 | 印象 | 3 | 形 | 2 |
| 積極 | 6 | 家庭 | 3 | 形態 | 2 |
| 多様 | 6 | 絵 | 3 | 見学 | 2 |
| 分かる | 6 | 学び | 3 | 現在 | 2 |

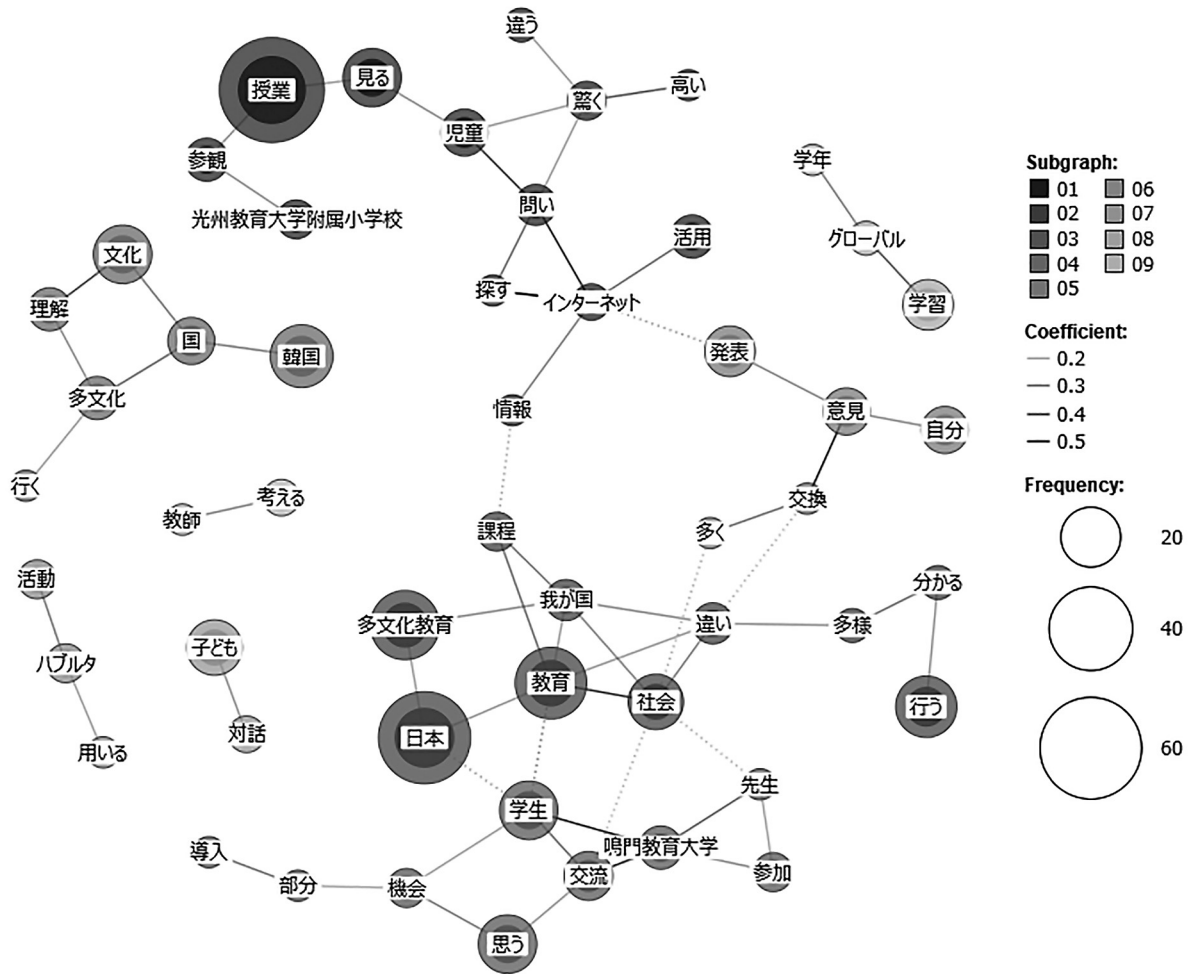


図3. 「研修後の感想」共起ネットワーク

表3を元に、「共起ネットワーク」のコマンドを用いて表したものが図3である。共起ネットワークの対象とした単語は出現数が5以上のものと設定している。この図3では、個々の円が単語を現しており、単語の出現数と円の大きさは対応している。また、それぞれの円を結ぶ線の太さは、語と語の関係、つまり、これらの単語が近い文章の中に出現する確率の高さ⁹⁾に対応している。つまり、語と語の関係が深いほど、この線は太くなる。では、学生の記述からどのような特徴が見いだせるだろうか¹⁰⁾。以下、ア～ウの3つの傾向を見ることができた。それぞれについてみていこう。

ア. 参観した授業での児童と教師の様子に対する感銘

図3の左上にある「授業」「参観」「見る」などの一群とつながる「児童」「問い」などの一群が見られる。実際の学生の記述から抜粋したものが以下である。

- 小学校六年生の授業では、異文化理解の導入の部分で、教科書の絵を見た児童が、これからこの単元でどのような学習をしていくのかという問いを立てて、その問いで、答えを探し、発表するという授業だった。
- 驚いたことが、児童が教科書の絵を見ただけで数多くの問いを引き出せるという点である。
- 私は、教科書の絵を見て問いを考えるという教師の発問に対し、それに対し答える児童の姿を全く想像できず、どのような問いが生まれるのだろうかと考えていた。
- 児童のレベルの高さに驚いた。また、出てきた問いに対しての答えを探す場面でもでてきた問いに対しての答えを探す場面でも、インターネットを活用し、積極的に調べており、児童の積極性の高さに驚いた。
- (児童が) 答えを堂々と発表している姿を見て、それだけのことができる児童を育てるための普通の教師の指導はどのようにしているのだろうか、自分も見習わなければならないと思った。

抽出語に対応する記述から、学生の感想の特徴を見ていこう。まず、「驚いたことが、児童が教科書の絵を見ただけで数多くの問いを引き出せるという点である」、「児童のレベルの高さに驚いた」のように児童の主体性の高さへの驚きが述べられている点である。参観したどちらの授業においても、児童の主体的な活動が中心であった点を指摘してのことであろう。また、児童の動きだけでなく、「児童を育てるための普段の教師の指導はどのようにしているのだろうか、自分も見習わなければならないと思った」のように、児童の動きだけでなく、その背後にある教師はファシリテーターとしての動きに着目した感想も見られる。

イ. 学生との交流を踏まえた日韓で「多文化教育」が違うことへの気づき

図3の中央にある「日本」、「多文化教育」「教育」「社会」などの一群とつながる「学生」「交流」などの一群が見られる。実際の学生の記述から抜粋したものが以下である。

- 日本と我が国の多文化教育の課程が大きく違うことには驚きました。
- 我が国では、高学年で、他の国の文化についての学習が行われるが、日本では、自分たちのことを中心に勉強することが分かりました。
- 機会があれば、日本に実際の授業を見てどんな部分に重点を置いて授業をしているのか知りたいと思った。
- 意見交換会では、学生たちと共に討論して我が国と日本の社会科教育課程、多文化教育という点から見た違いについて多くの勉強ができました
- 日本の学生とのやり取りから、韓国と日本はかなり違うことにも気づきました。
- 何が正しいといえるのか、簡単には判断できない問題なので、今後機会があれば、日本の学生たちとこの点について、より多くの討論をしてみたいと思います。
- 同じ文化圏の国であり、また、隣国でもある日本と韓国でも多文化教育の捉え方に差があるという点について非常に驚きました。

これらの抽出語から、「多文化教育」についての認識が違うことへの気づきをあげることができる。今回参観した授業は、「文化」についての授業であったためか、お互いのやりとりを通して、そもそもの「文化」についての認識が違うことに気づいたことがうかがえる。例えば、「日本の学生とのやり取りから、韓国と日本はかなり違うことにも気づきました」「同じ文化圏の国であり、また、隣国でもある日本と韓国でも多文化教育の捉え方に差があるという点について非常に驚きました」が挙げられる。また、その違いを踏まえ、「機会があれば、日本に実際の授業を見てどんな部分に重点を置いて授業をしているのか知りたいと思った」のように、さらに双方の理解を深めていこうという姿勢も見ることができた。

ウ. 韓国と日本の「多文化教育」に対する姿勢の違い

図3の左に「文化」「理解」「多文化」などの一群がある。実際の学生の記述から抜粋したものが以下である。

- 質問を通して分かったことは、日本の多文化教育の中心は、言語的な障壁と文化的な障壁を越えられるようにする支援であり、概して、適応教育の形態であるといえる。学生たちとこの点について、より多くの討論をしてみたいと思います。
- わが国の「多様」に配慮した多文化教育、日本の日本文化への適応を目的とした多文化教育という違いがあります。
- （日本では）韓国より、「多文化理解教育」が重要視されていないという点、他の国の文化に対して学ぶ機会が少ないという点が驚くべきことでした。
- 光州教育大学附属小学校の授業を見学して私が感じたことは、とても早い段階で異文化に触れる学習をしており、グローバルな意識が高いということでした。
- 小学校3年生と6年生の授業を参観したが、どちらとも、異文化に積極的に関わろう、異文化の理解を積極的に行なっていこうという子どもの意志、常にグローバルな視点を持った教師の指導を見ることができた。
- 早い段階で異文化理解を進めていくことで、韓国におけるグローバル化に対応できる姿勢が育てられているのではないか。
- 日本でも、これからグローバル化が進んでいくであろう。韓国と同様、早い段階での異文化理解学習を進めていく必要性を感じた。

ウ. と関連し、今度はその「文化」をめぐる捉え方の違いについて言及しているものである。

「わが国の「多様」に配慮した多文化教育、日本の日本文化への適応を目的とした多文化教育という違いがあります」「質問を通して分かったことは、日本の多文化教育の中心は、言語的な障壁と文化的な障壁を越えられるようにする支援であり」のように、グローバル化を教える姿勢の違い（多様化の容認と適応）が指摘されている。また、こういった捉え方の違いに加え、「異文化に積極的に関わろう、異文化の理解を積極的に行なっていく」という子どもの意志、常にグローバルな視点を持った教師の指導を見ることができた」のようにグローバル化に対する姿勢の違いや、「早い段階での異文化理解学習を進めていく必要性を感じた」のように学習時期の違いに言及しているものも見ることができた。

(2) 感想から見える傾向

上記の分析から、研修を受けた学生の記述から

ア. 参観した授業での児童と教師の様子に対する感銘

イ. 学生との交流を踏まえた日韓で「多文化教育」が違うことへの気づき

ウ. 韓国と日本の「多文化教育」に対する姿勢の違いを見ることができた。

ここから、児童の主體的な活動の様子に感銘している様子や、「多文化教育」についての捉え方、考え方に韓国と日本で異なるという点に着目していることが指摘できる。このような傾向について、日本と韓国の学生で比較するとどのような違いがあるだろうか。表6は、日本と韓国の学生の記述の傾向の違いを整理したものである。表6における数字は、数字が大きいくほど、特徴的な語であることを示しており、日本と韓国の集団に分けて記述を分析した場合、数字が大きく、特徴的である語の順に並べている。

これを見ると日本の学生は、「授業」(0.4198)、「子ども」(0.194)、「韓国」(0.1918)の語が特徴的であり、授業参観から韓国の特徴をとらえた学生が多いことがうかがえる。一方、韓国は、「教育」(0.4028)、「日本」(0.3816)、「学生」(0.2787)の語が特徴的であり、日本の学生との交流を通して、「教育」についての様子の違いに着目した学生が多いことがうかがえる。

この違いの生じる背景としては、参観した授業が自国か他国かの違いに由来するのではないかと考えられる。韓国の学生が日本の授業を見た際にどのような反応を示すかを確認することが必要であると言えよう。

表6. 韓国と日本の学生の記述を特徴づける語

| 日 本 | | 韓 国 | |
|-----|--------|--------|--------|
| 授業 | 0.4198 | 教育 | 0.4028 |
| 子ども | 0.194 | 日本 | 0.3816 |
| 韓国 | 0.1918 | 学生 | 0.2787 |
| 見る | 0.1622 | 文化 | 0.2763 |
| 学習 | 0.1618 | 思う | 0.2154 |
| 感じる | 0.1449 | 交流 | 0.2 |
| 多い | 0.1449 | 社会 | 0.1563 |
| 行う | 0.1333 | 我が国 | 0.15 |
| 自分 | 0.1304 | 鳴門教育大学 | 0.15 |
| 活用 | 0.1176 | 機会 | 0.1333 |

(数値は Jaccard の類似性測度)

5. 終わりに

本稿では、2017年に行った光州教育大学校と鳴門教育大学との連携による「社会科教育プログラム」を事例に、授業参観・検討会及びフィールドワークなどによる学生相互の交流を行った学生の授業観の特徴の整理を行った。学生は、児童、授業の進め方の様子から、そこに見られる「文化」の違いを意識し、受け入れようとしている姿勢を見ることができた。授業検討会でのディスカッションを通して、教育課程の違いへの気づきから、相手の国に対する興味関心の高まりを見ることができた。「高まり」や「気づき」のレベルではあるが、より実りある交流につながったと考える。

社会科は、当該国の歴史・文化と密接な関係があるため、単に授業を見るだけでは、日本から見た視点にとどまってしまう、グローバル教員に必要な資質・能力の育成につながらない。日韓で共通の教材を活用し、その見方の違いを通して共有することが必要といえよう。

最後に、今回の交流は、光州教育大学校からの支援と協力の上で成立したものである。今後、このような交流が単発で終わらないよう、光州教育大学校との連携をさらに、深めよりよい研修へと高める必要があるといえよう。

【文献】

森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書、1984年。

谷川彰英編『日韓交流授業と社会科教育』明石書店、2005年。

二谷貞夫研究代表・梅野正信編集責任『日韓で考える歴史教育―教科書比較とともに―』明石書店、2010年。

文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説（総則編）」2017年。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_001.pdf（2020年11月17日確認）

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシヤ出版、2018年。

崔晶基「光州民衆抗争と韓国の社会運動―1980年代初・中盤の学生運動を中心に―」歴史科学協議会編『歴史評論』2011年、10月号、pp. 17-28。

越中康治、高田淑子、木下英俊、安藤明伸、高橋潔、田幡憲一、岡正明、石澤公明「テキストマイニング」による授業評価アンケートの分析：共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み」宮城教育大学機関リポジトリ『宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE』22号、pp. 67-74、2015年。

file:///C:/Users/nahoi/Downloads/commue_22_067-074.pdf（2020年9月29日確認）

金鐘成「『対話型』国際理解教育への試み―日韓の子どもを主体とした「より良い教科書づくり」実践を事例に―」全国社会科教育学会『社会科研究』第84号、2016年、pp. 49-60。

【引用】

- 1) 鳴門教育大学 国際交流・日本型教育の海外展開
(<https://www.naruto-u.ac.jp/iso/global/h31/>) 2020年1月20日確認。
- 2) 金（2016）はこれらの問題性を指摘し、自己と他者の「真正な対話」に基づく、「対話型」国際理解教育を提案している。本論文では、金の批判を受け止めつつ、活動主義に陥らない「体験・交流型」の提案を目指している。
- 3) 社会科教育プログラム<大韓民国>
(<http://www.naruto-u.ac.jp/iso/global/h29/program-08.html>) 2020年1月31日確認。
- 4) KH Coder については、樋口（2018）を参考にした。
- 5) 今回の分析対象とはしていないが、韓国での様々な体験もまた、何らかの形で学生の見方・考え方に影響を与えたと考えられる。
- 6) 児童は、「3.世界の様々な自然と文化」の導入の頁の絵から問いを引き出していた。ここにはその後続く章立てとして、「1.世界の様々な国の姿 2.世界の多様な文化 3.私たちの国と世界の様々な国の関係」と書かれている。
- 7) ハブルタ[chavruta]とは、年齢、階級、性別に関係なく二人がペアを組んで論争を通じて真理を探ること。ユダヤ教徒の間で取り入れられた勉強法で、本授業を行ったキム・ギョンファン氏が取り入れている学習法である。
- 8) 分析には、樋口（2018）の KH Coder を用いた。なお、記述のテキスト化については、ハングルで書かれた記述を日本語に翻訳し、日本語で分析を行った。日本語と韓国語は異なる言語であるが、ともに SOV 型である。そのため、対応している語を確定しやすい名詞、地名、動詞、感動詞、形容詞、形容動詞を抽出対象としつつ、学生の記述をそのまま生かした分析をしている。
- 9) 今回は、Jaccard 係数で、つながりの強さを判定している。共起ネットワークについては、樋口（2018）の

pp. 147-150を参照のこと。

- 10) なお、日本の学生は、「異文化」、「多文化（韓国語では, 다문화）」の使い分けが見られた。一方、韓国語では、韓国の学生の記述にはこの使い分けは見られなかった。要因としては、「異文化」という言葉が一般的でないからと推察される。この点については次の研究課題としたい。

A study on The International Exchange Through Lesson Study: From An Analysis of Descriptions by Japanese and Korean Students

INOUE Naho

The purpose of this paper is to verify the students' view of lesson, who has different cultural backgrounds in teacher training. According to the globalization of society, it is required to foster a wide variety of perspectives, ways of thinking, and attitudes. In order to develop such abilities, it is important to formulate a project based on common experience while assuming contact with students from different cultural backgrounds. We clarify the specifics of the "social studies education program" planned based on this hypothesis, with Japanese and Korean students. Furthermore, from the descriptions by the students who received common lesson study, Japanese and Korean students' view of lessons was analyzed.